

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520129

研究課題名（和文） 平安朝物語における 本文 生成の機構 定家校訂テキストと非校訂テキストとの比較

研究課題名（英文） Processes for Reproducing Heian Era Narrative Literature (from original manuscripts) – Comparisons of Texts Edited and Not Edited by Fujiwara Teika

研究代表者

仁平 道明（NIHEI MICHIAKI）

和洋女子大学・言語・文学系・教授

研究者番号：00042440

研究成果の概要（和文）：

本研究は、平安朝物語特に『伊勢物語』と『源氏物語』について、現在諸書がそれによっている藤原定家が校訂を加えて生まれた本文と、定家が校訂を加えていないと考えられる本文とを比較し、定家校訂以前の本文の形と、定家が校訂を加えて本文を形成していく機構を明らかにすることを企図したものであった。特に、古筆切の調査によって、鎌倉時代の伝衣笠家良筆の断簡等の本文が従来知られている諸系統の本文とかなり異なっているなど、『伊勢物語』の本文が多様なものであったことが確認され、定家がその中から選択した一部のものについて、仮名遣い等を改める程度の最小限の本文校訂を加えるにとどめた可能性が考えられることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research sought to clarify the processes used in reproducing Heian Era narrative literature from original manuscripts, particularly the *Ise Monogatari* and *Genji Monogatari*, edited by Fujiwara Teika. This was accomplished by comparing passages from original manuscripts edited by Fujiwara with those believed to have not been edited by Fujiwara. Studies of ancient writing fragments of the previously recognized systems have confirmed the variety of the text in the *Ise Monogatari*, and differ from those of letters from Kinugasa Ieyoshi from the Kamakura Era. It is believed that Fujiwara Teika selected portions of the *Ise Monogatari* and made minimal changes to the original manuscript such as adding the use of kana orthography.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：『伊勢物語』・『源氏物語』・国文学・定家・定家本・平安朝物語・本文・校訂

1. 研究開始当初の背景

知られるように、平安朝物語の「原本」は、現在全て失われ、残っているものは一つもない。現存するものは全て書写を経た写本である。原本が失われ、理論的にも現実的にもそれを復元することが不可能になった平安物語の本文について、特に鎌倉期の写本が複数残る『伊勢物語』及び『源氏物語』を対象とするこれまでの伝本及び本文の研究の多くは、藤原定家が校訂した本文への遡源を目標として行われてきたといえよう。また『伊勢物語』『源氏物語』の伝本研究、本文研究は、その系統分類と諸本の系統への位置付けを中心とするものがほとんどであり、定家の校訂以前の姿を推測することの困難さから、定家校訂によるテキストの生成がどのように行われたのかということについての十分な研究がなされていない状況にあったといえよう。定家本の定家筆原本への遡源とその復原を目的とせず、その校訂のあり方の特徴と非定家校訂テキストの本格的検討を行う本研究は、定家テキストの復原を目標とすることが多い平安物語の本文研究の中で独自の位置を占めるものになるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

「平安朝物語における 本文 生成の機構 定家校訂テキストと非校訂テキストとの比較」と題する本研究は、定家校訂テキストへの遡源とその復元を目的とする定家至上主義を離れ、一見混乱した本文を持つように見える定家校訂以前のテキストの本文と定家校訂テキストとを比較することによって、平安朝物語の本文読解のためのテキストとして広く利用されている、いわゆる定家本の本文 がどのような本文から、どのような判断によって生成しているのかを明らかにし、可能な場合はその原則を探り、平安朝物語の本文として採用されることの多い定家校訂テキストの 本文 生成の機構を究明し、また、その校訂によらない本文のかたちの再評価を試み、定家の判断と校訂を通さない、

『伊勢物語』でいえば「古本」系の本文の検討によって、平安朝物語の本文の定家校訂以前のかたちの一部をかいま見することを企図した。

3. 研究の方法

『源氏物語』における青表紙本系と河内本、別本のうち青表紙本系に入る部分のある混態本を除いたものとの比較研究を行った従来の研究成果を視野に入れながら、その結果をも利用しつつ、『伊勢物語』で、特に、定家校訂以前のかたちを残す部分があると判断される『伊勢物語』の「古本」あるいは「別本」として位置づけられている諸本と定家校訂の建仁二年本、武田本、天福本等の比較によって、その作業を行うこととした。そのための資料となる定家校訂テキストとは異なるものである可能性を持つ伝本は、現在何本が残っているが、その一つに、近時、中古文学会40周年記念大会における研究発表、加藤洋介「建仁二年定家本伊勢物語の復原」において、下巻のみの時雨亭文庫蔵の建仁二年本系伝本の欠を補うものとして紹介された本(現天理図書館蔵七海家旧蔵本)があるが、その本は、定家本の定家仮名遣い「おとこ」とは異なる「をとこ」とする仮名遣いから見て、単純に定家書写の建仁二年本系のものとして位置付けるのは問題があり、定家書写の本の祖本としての位置を持つ「古本」(池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 研究編』では「古本」に分類されていた。)の一つである可能性が考えられるものであった。古筆切も加えて、他にもそのような非定家校訂テキストである可能性が考えられる伝本があり、それと定家校訂テキストである定家本との比較によって、定家校訂以前の物語の本文のかたちの一部をのぞきみると同時に、鎌倉時代以降、尊重され広まってきた、諸テキストの底本として物語の読解の前提本文として扱われることが少なくない定家校訂による 本文 生成の機構を明らかにすることもあるいは可能になるのではないかと考えた。理論的には遡源不能である「原本」との距離は測り

がたいものの、定家による平安朝物語の校訂本文の向こうに存在した本文を、作られた本文の「癖」のフィルターを可能な限り透明なものにし、作品に対するための方途を模索するという難問に取り組むこととした。定家の本文生成の機構とその本文の特質を知ることが可能になると考えてのことであった。また、定家校訂テキストとは異なる非定家校訂テキストを検討することによって、それ以前の本文のさまざまなかたちの中から、平安朝物語の姿を透視することは困難であるにしても、そのかたちの一部が浮かび上がってくるのではないかということも期待しうるとも考えた。

4. 研究成果

上記の目的と方法による本研究を、限られた期間で有効に行うために、その対象は主として『伊勢物語』とし、その諸テキストの検討による結論の妥当性の検証のために、『源氏物語』諸本における青表紙本等の定家本と「別本」のうち定家本と河内本の混態本とは異なる性格を持つ諸本における類似の例の検討を行った。まず『伊勢物語』諸伝本のうち、池田亀鑑等によって「別本」に分類された諸本について、その実態を本行本文と書き入れ・校合の別を精密に検討し、定家の校訂を経た伝本と非定家校訂本との弁別を行い、さらに定家校訂テキストと非校訂テキストの本文との比較を行い、定家の校訂のあり方を詳細に見ていくことで、定家による本文生成の機構を明らかにすることを目指した。そのために、『源氏物語』における同様の関係にあると考えられる本文の比較検討を行い、『伊勢物語』の場合と同様のあり方が認められるかどうかということを確認することによって、その検証を行った。その際、研究代表者が課題研究開始以前に『惟規集』断簡の研究(『汲古』43号 2005・50号 2006掲載の「伝為藤筆惟規集断簡」・『惟規集』断簡「またしらて」)において行った字母の比較による系統研究、伝本の位置付けの方法を援用し、従来の字句の異同による系統研究の方法をさらに精密化しうることが見通された。ただ、三年の研究期間内における研究という時間的制約と実物の調査あるいは写真の入手が可能な伝本は多くなく、翻刻された活字によらずに実物の調査と撮影によって字母を確認しうる影印データを部分的にしか入手できず、検討資料に限界があったため、定家校訂テキスト以前の本文としての認

定を行いう得た資料は限定的であった。その中で、前述した天理図書館蔵七海家旧蔵本や、建仁二年本系として誤って位置づける中田武司説のような見解もあった専修大学蔵寂身本の本行本文が「古本」として位置づけるべきものであることを明らかにした林美朗の研究等によって、「古本」として考えるべき本文は増えており、また「3. 研究の目的」でふれた建仁二年定家書写の親本も、当然のことながら、それが存在していたならば「古本」として分類されるべきであった本である。(なお、池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究研究編』において古本系に分類されていた最福寺本は、実物を調査した結果、定家仮名遣いと非定家仮名遣いが混用されている等の点からみても、かつて片桐洋一氏が中古文学会で最福寺本について報告されたように、純粋な「古本」と言いうるものではなく定家本的な性格がかなりの部分に見られる混態本として扱うべきものであることが、あらためて確認された。)さらに、数の上からは限定的なものでしかない完本以外にも、数多い『伊勢物語』の古筆切のうち「古本」の特徴をそなえているものを、公刊されている図録や新たに見いだされた新出断簡を入手して検討した。それ等の本や古筆切と、武田本・天福本等の定家本との比較によって定家校訂のテキストにおける本文生成の機構をと定家校訂テキストの特徴を考えた結果、以下の概括のような結論が得られた。すなわち、『伊勢物語』については、仮名遣い等による、定家が校訂を加えた定家本とは異なる非定家校訂本の本文を弁別するための指標が得られ、その指標によって、近年一部で定家校訂のテキストの系統に分類された伝本が非定家本として位置付けるべきものであること等が判明した。そのようにして位置付けをし直した現在残されている非定家本と定家本との比較によっては、定家校訂テキストと非定家校訂テキストとの本文の差異に、必ずしも決定的な有意の方向性の違いは見いだされなかった。しかしながら、古筆切の調査では、鎌倉時代の伝衣笠家良筆の断簡等の本文が従来知られている諸系統の本文とかなり異なっているなど、『伊勢物語』の本文が予想以上に多様なものであったことが確認され、定家がその中から選択した一部のものについて、仮名遣い等を改める程度の最小限の本文校訂を加えるにとどめた可能性が考えられた。また『源氏物語』については、従来の系統分類やその本文の性格についての研究成果を大きく変える結果を見いだすことは出来なかったものの、別本系の伝為相筆

の『源氏物語』断簡(個人蔵)等の調査によって、定家が校訂した青表紙本系でもなく河内本系でもなく、またその混態本でもない、その本文が、青表紙本・河内本の本文とはかなり異なる表現のものであり、そのことから、定家校訂のテキストが多様な『源氏物語』の本文の中の一つの選択肢にすぎなかったものとして位置付けられる可能性があることをあらためて確認し得たこと等の成果があった。3年の研究期間内で明らかにし得た結果は限定的なものであったが、課題とした研究を完成するための今後の研究の方法と方向性が得られたという点で、本研究の成果に評価すべきものがあったと言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- 仁平道明、『伊勢物語』と 歴史 『古今和歌集』の本文からの変容、2010 台大平安朝文学国際学術研究会論文集、査読無、2010、pp.9-30
- 仁平道明、暗い 終わり 『源氏物語』の結末、査読無、国文学解釈と鑑賞、75 巻3号、2010、pp.54-63
- 仁平道明、女性の文学としての『源氏物語』 男主人公へのまなざし、査読有、日語日文学研究(韓国日語日文学会)、69 輯2巻、2009、pp.3-26

〔学会発表〕(計4件)

- 仁平道明、『伊勢物語』と 歴史 『古今和歌集』の本文からの変容、2010 台大平安朝文学国際学術研究会、2010年2月27日、台湾大学(台湾・台北市)
- 仁平道明、女性の文学としての『源氏物語』 男主人公へのまなざし、韓国日語日文学会 2008 年度冬期国際学術大会、2008年12月20日、明知大学校(韓国・ソウル市)
- 仁平道明、古典籍断簡(古筆切)の意義、台湾大学日本語文学系所演説会、2008年5月28日、台湾大学(台湾・台北市)
- 仁平道明、文学テキストのかたち 写本断簡(古筆切)の意義を中心に、興国管理学院応用日語系2007年日本研究学術検討会、2007年12月28日、興国管理学院(台湾・台南市)

〔図書〕(計2件)

- 仁平道明、他、伊勢物語 虚構の成立、2008、pp.60-85
- 仁平道明、他、源氏物語へ源氏物語から 中古文学研究24の証言、笠間書院、2007、pp.434-461

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
無し

6. 研究組織

(1)研究代表者

仁平 道明(NIHEI MICHIAKI)
研究者番号：00042440

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：